

トレ・センに政治生命をかけた男

平成の大合併で茨城県の「村」は、東海と美浦の2村となった。多くの自治体は、人口減や厳しい見通しを背景に隣接自治体と合併の道を選んだ。結果、県内に32の「市」と10の「町」が生まれた。

「村」のままで踏みとどまった2つの自治体は、いずれも村の代名詞ともいえる施設をもっていた。うち美浦村には、約67万坪、東京ドームの48倍もの広さを有する日本中央競馬会(JRA)美浦トレーニング・センター(以下トレ・セン)がある。

「農業を継ぐ人が減り、人口は8,000人台。このままだとジリ貧になる」。2期目後半に入った美浦村長、糸賀喜一(1904-1984)は、公害がなく、財政を助け、人口増につながる企業の誘致を県に働きかけていた。昭和38-39年(1963-1964)頃のことだ。

最初、県からもたらされた話は、北海道の牧場を送る牧草の栽培だった。これを断った糸賀のもとに、ほどなくして「JRAが関東地

区に競走馬のトレ・センをつくる」という話もたらされた。

JRAは、競馬場と競走馬の調教と飼養管理を分ける政策を進めていた。昭和40年(1965)、関西地区には、滋賀県栗東町(りっとうちょう)に栗東トレ・センを建設することで、栗東町と用地売買契約が成立していた。

次は関東地区だった。関東全域から68カ所にも上る候補地が挙がっていた。美浦村は一番、遅かった。それでも糸賀は、県の協力のもと誘致に動き出す。予定地内に40haの山林を所有していた大口地権者を説得、協力を得た。これがはずみになった。村の企画開発課長(当時)を事業担当者に抜擢し、本格的な誘致運動に入った。

昭和42年(1967)、JRAが適地調査に村を訪れる。翌年(1968)4月、糸賀は3期目を無投票当選で飾った。それから3ヶ月後の同年7月、JRAから「美浦内定」が伝えられた。

①広大な用地が容易に取得できる②気候が

糸賀喜一

Itoga Kiichi

温暖③常磐自動車が開通すればアクセスが良くなる④地元が熱心一等が決め手となったと考えられている。昭和43年(1968)、岩上知事(当時)立ち合いで、JRAと「用地売買斡旋に関する基本契約」が締結された。

糸賀は回顧録の中で「代替地を求める地主にはどんな高価な犠牲を払ってでも代替地を与えた」と語る。買収予定地権者171人の多くから代替地要求が出された。村は必死に村内で畑地や水田、宅地の造成工事をして要望に応えたのである。

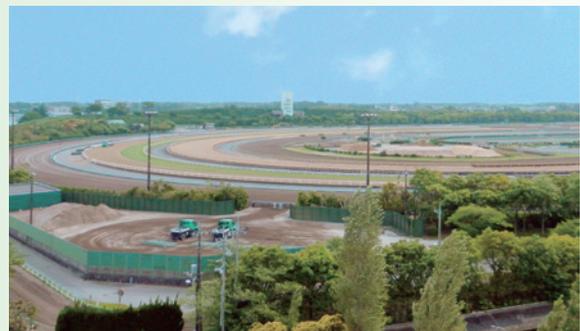
糸賀は振り返っている。「いまから考えて、ヒヤッとさせられたことは、このとき私がたとえいくらでも変なことをして、手を汚していたら、このトレ・センは後破算になっていたはずで、政治に携わる者に私心があつたら身を誤る」と。

昭和53年(1978)4月、美浦トレ・センの開場式が行われた。昭和50年(1975)の国勢調査で8,161人だった人口は、昭和55年(1980)1万3,509人、平成12年(2000)に1万8,219人となった。

糸賀は旧木原村(現美浦村)の農家の出身。木原尋常高等小学校高等科を卒業し、56歳の時、美浦村長選に初当選。以来5期、歴史に残る大事業を成し遂げた。(敬称略)

主な参考文献

「野人村長一代 糸賀喜一回顧伝」(水上文男著)
「日本中央競馬会美浦トレーニング・センター開発の記録—その生い立ちと発展の軌跡」(美浦村発行)



広報会館からみたJRA美浦トレ・セン南調教馬場風景
=稲敷郡美浦村美駒(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「政治」のヒント